

自立を促すための座位姿勢保持 ー全盲の方への支援を振り返ってー

17 cc 03 内野初音

I. はじめに

正しくない座位姿勢を行い続けると、褥瘡など様々な病気や障害の原因や心理的にも萎縮し、生活意欲、生活機能が低下し、QOL が著しく低下する¹⁾。

実習で病気によって全盲となった A 様の「自分のことを少しはしたい」という希望を元に、現在行えていることを継続するにはどのような支援が必要であるかを考え座位姿勢に着目した取り組みを行ったので振り返る。

II. 実習先種別・実習期間

実習先種別：障害者支援施設

実習期間：2018 年 6 月 25 日～7 月 23 日（23 日間）

III. 受け持ち利用者の紹介

氏名：A 様 性別：女性 年齢：70 代前半

介護が必要になった主な疾患・障害：外傷性脳障害、
脊髄膜炎による視神経萎縮によって失明（全盲）

ADL：

移動：車いす 介助

食事：一部介助（声掛け）、

1 回の水分摂取で 200ml のコップ 2 杯を目標（食事を含む 1 日 5 回、ケアプラン）

コミュニケーション：全盲、言語正常

IV. 介護の実際

1. 情報の解釈・関連づけ・統合

「何かしたい」「自分の事は少しはしたい」と思っているが、目の見えないことから「何も見えないから無理」と思い、日中はフロアでボーっとしていることが多い。また、乗車時や食事中には「腰が痛い」という発言が多くみられ前傾姿勢になることが多い。声掛けを行うもすぐに崩れてしまうため、姿勢が崩れた状態で長時間座っていると座位姿勢の維持が難しくなり、現在できているができなくなる恐れがある。

2. 介護上の課題：

身の回りのことが自分で行えるように、腰痛や前に崩れることのない姿勢を保持する必要がある

3. 介護計画

長期目標：

無理のない姿勢を保ち、最後まで自力で食事摂取、水分摂取することができる

短期目標：

姿勢が崩れることなく車いすに座ることができる

具体的援助内容：

水分摂取時の前や途中で姿勢が崩れたら正しい姿勢になるようにする

4. 実施及び結果

水分摂取前や水分摂取時に姿勢が崩れていた場合は、姿勢が崩れていることを伝えて姿勢を直すように促す。声掛けがあれば自力で上半身のみ姿勢を直し、腰痛の訴えを軽減する。

姿勢を直しても水分摂取の途中で前かがみに崩れることがある。

V. 考察

人間は情報の 80%以上を視覚で補っているが、視覚からの情報が無いことから多くの不安があり、全盲の方への基本的な支援として声掛けが重要であることから声掛けを主に行ったが、座位姿勢保持への支援として声掛けだけでは不十分であることが分かった。A 様は高齢で筋力低下の様子がみられることから、自力で姿勢を直せる範囲は上半身だけであると考えられる。またはじめにで触れた正しい座位姿勢とは、足底がしっかりと接地していて股関節、膝関節が 90 度近くになっている状態、また車いす座位ではフットサポートはできる限り使用せず、足底を接地することが望ましい²⁾と述べた。A 様は車いすでフットサポートを使用していたことから股関節や膝関節は 90 度近くになっていないことが考えられる。正しい姿勢を保持するには上半身だけでなく下半身への支援も必要であることを振り返ることができた。

VI. おわりに

今回立案した介護過程では姿勢保持について行った。正しい座位姿勢から下半身への支援を立案時、実施時には気づくことができなかったことから今後は自分自身の知識を増やしていくことが必要だと感じた。

引用・参考文献

- 1) 中央法規出版編集（2018 年）「介護専門職の総合情報誌 おはよう 21 2Feb.2018」
中央法規 p.24
- 2) 鈴木禎、光野有次、串田英之（2013 年）「寝かせきりにしない！「坐り」ケアの実践
笑顔を引き出すシーティング」ヒポ・サイエンス p.2